

33 担がん患者および血液腫瘍性疾患における顆粒リンパ球の関与

○三橋由美 田口 敏 松林恵子 麻生裕康
(千葉県がんセンター)

【はじめに】顆粒リンパ球(以下 GL)は細胞内顆粒により細胞障害機能を示すリンパ球であり、多くはNK細胞型で一部はCD8陽性T細胞と言われている。特にNK細胞は、非感作で抗腫瘍活性や抗体産生系細胞に対する調節作用を持つことで生体防衛免疫監視機構を担う細胞として注目されている。今回、我々は担がん患者ならびに血液腫瘍性疾患におけるGLの関与について検討したので報告する。

【対象・方法】①塗抹標本上で3個以上の顆粒が見られたリンパ球をGLとし、GLが50%以上を示した患者16例についてFCMを用いて細胞表面マーカーの検索を行った。また、同時にGiemsa染色標本によるアズール顆粒の形態学的所見を観察した。②白血球数が3000/ μ l以上、リンパ球実数が1000/ μ l以上を示した患者から無作為抽出した84例について、カウントを行い、リンパ球に占める割合を算出した。

【結果・考察】①FCMによるリンパ球領域の解析ではCD8細胞あるいはCD16やCD56が優位な例が見られたが、アズール顆粒には明瞭な形態学的特徴は認めなかった。②84症例の疾患別例数とGLの割合の中央値は、消化器系腫瘍患者22例23.3%、泌尿器系腫瘍15例25.0%、呼吸器系腫瘍11例29.5%、婦人科系腫瘍11例16.5%、乳腺腫瘍16例20.0%、血液細胞系腫瘍9例30.0%と、健常者23例16.5%に比し婦人科系腫瘍を除く全疾患群で有意に高値を示した。一方、これらの患者を治療前(初診時)、治療中、治療後で見ると、中央値はそれぞれ24.5、21.8、23.5%と有意差は見られなかった。また、健常者のNK細胞については加齢による増加や性差についての報告があるが、一致した結果は得られていない。今後、GLの形態を示す細胞の細胞表面マーカー検索による解析を含め、多くのデータを蓄積し更に解析を進めたい。

連絡先 043-264-5431

34 平成17年度血液検査研究班精度管理報告

○古賀智彦(千葉社会保険病院) 綿引一成(千葉県こども病院) 吉田隆(株サンリツ) 佐藤正一(千葉県循環器病センター) 小池修司(千葉県救急医療センター) 柿沼豊(千葉市立青葉病院) 麻生裕康(千葉県がんセンター) 大山正之(千葉大学医学部附属病院)

【はじめに】現在使用されている機器は、各メーカーより多数販売されており、それに伴う機種間差も問題となっている。自動血球計数装置の精度向上により、血球計数における機種間差は以前に比べ小さくなったといわれているが、依然として機種間差が認められるのが現状であり、用いられる標準血球ならびにコントロール血球にもその一因があると思われる。本年度も人工的に作成した試料ではなく、生血を用いてのデータ収集、解析を試みた。

【方法】サンプルA、サンプルBの2濃度を配布する。各施設で使用している機器を用いて白血球数、赤血球数、ヘモグロビン濃度、ヘマトクリット値、MCV、血小板数、白血球5分類を実施してもらう。

【まとめ】本年度はより実際の血算測定に近いように抗凝固剤としてEDTA(K2)を単独で用いた。CBCにおいて経時的に測定値が低下したもの、上昇したものもあり、その原因や対策について追求したい。

043-261-2211